



システム メッセージ ログिंगの設定

この章では、アクセス ポイントにシステム メッセージ ログिंगを設定する方法について説明します。



(注)

この章で使用するコマンドの構文と使用方法の詳細は、『Cisco IOS Configuration Fundamentals Command Reference for Release 12.3』を参照してください。

この章の内容は、次のとおりです。

- システム メッセージ ログिंगの概要 (P. 21-2)
- システム メッセージ ログिंगの設定 (P. 21-3)
- ログング設定の表示 (P. 21-13)

システム メッセージ ログिंगの概要

デフォルトでは、アクセス ポイントはシステム メッセージと `debug` 特権 EXEC モードからの出力をログング プロセスに送信します。ログング プロセスは、設定に応じてログング バッファ、端末ライン、UNIX syslog サーバなどさまざまな宛先へのログング メッセージの配布を制御します。このプロセスはコンソールにもメッセージを送信します。



(注) syslog 形式は 4.3 BSD UNIX と互換性があります。

ログング プロセスを無効にすると、メッセージはコンソールにのみ送信されます。メッセージは生成の途中で送信されるため、メッセージと `debug` の出力はプロンプトや他のコマンドの出力と混在します。メッセージを生成したプロセスが終了した後で、コンソールにメッセージが表示されます。

コンソールと各送信先に表示されるメッセージのタイプを制御する場合、メッセージの重大度レベルを設定できます。ログ メッセージにタイムスタンプを適用したり、syslog 送信元アドレスを設定したりすると、リアルタイムのデバッグと管理を強化できます。

ログングされたシステム メッセージにアクセスするには、アクセス ポイントの Command-line Interface (CLI; コマンドライン インターフェイス) を使用するか、適切に設定された syslog サーバに保存します。アクセス ポイントのソフトウェアは、syslog メッセージを内部バッファに保存します。Telnet を通じてアクセス ポイントにアクセスしたり、syslog サーバでログを表示したりすることでシステム メッセージをリモートに監視できます。

システム メッセージ ログिंगの設定

この項では、システム メッセージ ログिंगを設定する方法について説明します。内容は次のとおりです。

- システム ログ メッセージの形式 (P. 21-3)
- システム メッセージ ログिंगのデフォルト設定 (P. 21-4)
- メッセージ ログिंगの無効化と有効化 (P. 21-4)
- メッセージ表示先デバイスの設定 (P. 21-5)
- ログ メッセージのタイムスタンプの有効化と無効化 (P. 21-6)
- ログ メッセージのシーケンス番号の有効化と無効化 (P. 21-7)
- メッセージ重大度の定義 (P. 21-7)
- 履歴テーブルと SNMP に送信される syslog メッセージの制限 (P. 21-9)
- ログング レート制限の設定 (P. 21-10)
- UNIX Syslog サーバの設定 (P. 21-10)

システム ログ メッセージの形式

システム ログ メッセージには、最大 80 の文字とパーセント記号 (%) が使用できます。設定している場合は、オプション シーケンス番号またはタイムスタンプ情報を文字の前に指定できます。メッセージは次の形式で表示されます。

```
seq no:timestamp:%facility-severity-MNEMONIC:description
```

パーセント記号の前のメッセージ部分は、`service sequence-numbers`、`service timestamps log datetime`、`service timestamps log datetime [localtime] [msec] [show-timezone]`、または `service timestamps log uptime` のどのグローバル設定コマンドを設定しているかにより異なります。

表 21-1 に、syslog メッセージの要素が記載されています。

表 21-1 システム ログ メッセージの要素

要素	説明
<code>seq no:</code>	グローバル設定コマンド <code>service sequence-numbers</code> が設定されている場合にのみ、ログ メッセージにシーケンス番号がスタンプされます。 詳細は、「 ログ メッセージのシーケンス番号の有効化と無効化 」の項 (P. 21-7) を参照してください。
<code>timestamp formats:</code> <code>mm/dd hh:mm:ss</code> または <code>hh:mm:ss</code> (短い稼働時間) または <code>d h</code> (長い稼働時間)	メッセージまたはイベントの日付と時間。この情報が表示されるのは、グローバル設定コマンド <code>service timestamps log [datetime log]</code> が設定されている場合のみです。 詳細は、「 ログ メッセージのタイムスタンプの有効化と無効化 」の項 (P. 21-6) を参照してください。
<code>facility</code>	メッセージが参照するファシリティ (SNMP、SYS など)。ファシリティはハードウェア デバイス、プロトコル、システム ソフトウェアのモジュールのいずれかになります。システム メッセージのソースまたは原因を表します。

■ システム メッセージ ログिंगの設定

表 21-1 システム ログ メッセージの要素 (続き)

要素	説明
<i>severity</i>	メッセージの重大度を表す 0 ~ 7 の 1 桁のコード。重大度レベルについては、表 21-3 (P.21-8) を参照してください。
<i>MNEMONIC</i>	メッセージを固有に説明するテキスト文字列。
<i>description</i>	レポートされるイベントの詳細な情報を示すテキスト文字列。

次の例は、アクセス ポイントの部分的なシステム メッセージを示します。

```
00:00:46: %LINK-3-UPDOWN: Interface Port-channel1, changed state to up
00:00:47: %LINK-3-UPDOWN: Interface GigabitEthernet0/1, changed state to up
00:00:47: %LINK-3-UPDOWN: Interface GigabitEthernet0/2, changed state to up
00:00:48: %LINEPROTO-5-UPDOWN: Line protocol on Interface Vlan1, changed state to down
00:00:48: %LINEPROTO-5-UPDOWN: Line protocol on Interface GigabitEthernet0/1, changed
state to down 2
*Mar 1 18:46:11: %SYS-5-CONFIG_I: Configured from console by vty2 (10.34.195.36)
18:47:02: %SYS-5-CONFIG_I: Configured from console by vty2 (10.34.195.36)
*Mar 1 18:48:50.483 UTC: %SYS-5-CONFIG_I: Configured from console by vty2
(10.34.195.36)
```

システム メッセージ ログिंगのデフォルト設定

表 21-2 は、システム メッセージ ログिंगのデフォルト設定を示しています。

表 21-2 システム メッセージ ログिंगのデフォルト設定

機能	デフォルト設定
コンソールへのシステム メッセージ ログिंग	有効
コンソールの重大度	debugging (および数値の低いレベル。表 21-3 (P.21-8) を参照)
ログング バッファ サイズ	4096 バイト
ログング履歴サイズ	1 メッセージ
タイムスタンプ	無効
同期ログング	無効
ログング サーバ	無効
syslog サーバ IP アドレス	設定されていません。
サーバファシリティ	Local7 (表 21-4 (P.21-12) を参照)
サーバ重大度	informational (および数値の低いレベル。表 21-3 (P.21-8) を参照)

メッセージ ログングの無効化と有効化

メッセージ ログングはデフォルトで有効に設定されています。コンソール以外の宛先にメッセージを送信する場合は、有効に設定されている必要があります。有効になっている場合、ログ メッセージはログング プロセスに送信されます。このプロセスはメッセージを生成したプロセスとは非同期に指定された場所にメッセージをログングします。

特権 EXEC モードから、次の手順に従ってメッセージ ログングを無効にします。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>no logging on</code>	メッセージ ログिंगを無効にします。
ステップ 3	<code>end</code>	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	<code>show running-config</code> または <code>show logging</code>	入力内容を確認します。
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code>	(オプション) コンフィギュレーション ファイルに入力内容を保存します。


ログング プロセスを無効にすると、アクセス ポイントの速度が遅くなる場合があります。これはメッセージがコンソールに書き込まれるまで待ってからプロセスで次の動作が行われるためです。ログング プロセスが無効になっている場合、メッセージは生成された直後、多くの場合コマンド出力の途中でコンソールに表示されます。

グローバル設定コマンド `logging synchronous` もコンソールへのメッセージの表示に影響します。このコマンドを有効にすると、メッセージは Return キーを押した後に表示されます。詳細は、「[ログメッセージのタイムスタンプの有効化と無効化](#)」の項 (P. 21-6) を参照してください。

メッセージ ログングを無効にした後で再度有効にする場合は、グローバル設定コマンド `logging on` を使用します。

メッセージ表示先デバイスの設定

メッセージ ログングを有効にしている場合、メッセージをコンソール以外に特定の場所に送信できます。特権 EXEC モードから、次のコマンド 1 つまたは複数を使用してメッセージを受信する場所を指定します。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>logging buffered [size] [level]</code>	メッセージを内部バッファにログングします。デフォルトのバッファ サイズは 4096 です。範囲は 4096 ~ 2147483647 バイトです。レベルには emergencies 0、alerts 1、critical 2、errors 3、warnings 4、notifications 5、informational 6、debugging 7 を指定します。  (注) バッファ サイズは大きくすぎないでください。これは、アクセス ポイントが他の作業の分のメモリを消費してしまうためです。アクセス ポイントのプロセッサの空きメモリを表示する場合は <code>show memory</code> 特権 EXEC コマンドを使用します。ただし、この値は使用可能な最大メモリ量です。バッファ サイズをこの数値に設定しないでください。

■ システム メッセージ ログイングの設定

	コマンド	目的
ステップ 3	<code>logging host</code>	メッセージを UNIX syslog サーバ ホストにログイングします。 <i>host</i> には、syslog サーバとして使用するホストの名前または IP アドレスを指定します。 ログイング メッセージを受信する syslog サーバのリストを作成する場合は、このコマンドを複数回入力します。 syslog サーバの設定手順の詳細は、「UNIX Syslog サーバの設定」の項 (P. 21-10) を参照してください。
ステップ 4	<code>end</code>	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 5	<code>terminal monitor</code>	現在のセッション中にコンソール以外の端末にメッセージをログイングします。 端末パラメータ設定コマンドはローカルに設定され、セッションの終了後は無効になります。デバッグ メッセージを確認する場合は、各セッションでこの手順を実行する必要があります。
ステップ 6	<code>show running-config</code>	入力内容を確認します。
ステップ 7	<code>copy running-config startup-config</code>	(オプション) コンフィギュレーション ファイルに入力内容を保存します。

グローバル設定コマンド `logging buffered` は、ログイング メッセージを内部バッファにコピーします。バッファは循環型であるため、バッファが一杯になると新しいメッセージにより古いメッセージが上書きされます。バッファにログイングされたメッセージを表示する場合は、`show logging` 特権 EXEC コマンドを使用します。最初に表示されるメッセージは、バッファで最も古いメッセージです。バッファの内容をクリアするには、`clear logging` 特権 EXEC コマンドを使用します。

コンソール以外のターミナルへのログイングを無効にするには、グローバル設定コマンド `no logging console` を使用します。ファイルへのログイングを無効にするには、グローバル設定コマンド `no logging file [severity-level-number | type]` を使用します。

ログ メッセージのタイムスタンプの有効化と無効化

デフォルトでは、ログ メッセージにはタイムスタンプが設定されていません。

特権 EXEC モードから、次の手順に従ってログ メッセージへのタイムスタンプを有効にします。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>service timestamps log uptime</code> または <code>service timestamps log datetime [msec] [localtime] [show-timezone]</code>	ログ タイムスタンプを有効にします。 最初のコマンドにより、ログ メッセージへのタイムスタンプが有効になり、システムがリブートしてからの時間が表示されます。 2 番目のコマンドにより、ログ メッセージへのタイムスタンプが有効になります。選択したオプションに応じて、タイムスタンプに日付、時間 (ローカル時間帯を基準、単位 = ミリ秒)、タイムゾーン名を指定できます。
ステップ 3	<code>end</code>	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	<code>show running-config</code>	入力内容を確認します。

	コマンド	目的
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code>	(オプション) コンフィギュレーション ファイルに入力内容を保存します。

デバッグとログ メッセージの両方に対してタイムスタンプを無効にするには、グローバル設定コマンド `no service timestamps` を使用します。

次の例は、グローバル設定コマンド `service timestamps log datetime` を有効にした場合のログング表示の一部を示しています。

```
*Mar 1 18:46:11: %SYS-5-CONFIG_I: Configured from console by vty2 (10.34.195.36)
```

次の例は、グローバル設定コマンド `service timestamps log uptime` を有効にした場合のログング表示の一部を示しています。

```
00:00:46: %LINK-3-UPDOWN: Interface Port-channel1, changed state to up
```

ログ メッセージのシーケンス番号の有効化と無効化

複数のログ メッセージに同じタイムスタンプが付く可能性があるため、特定のメッセージを明確に参照する場合はメッセージにシーケンス番号を表示します。デフォルトでは、ログ メッセージにシーケンス番号は表示されません。

特権 EXEC モードから、次の手順に従ってログ メッセージへのシーケンス番号を有効にします。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>service sequence-numbers</code>	シーケンス番号を有効にします。
ステップ 3	<code>end</code>	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	<code>show running-config</code>	入力内容を確認します。
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code>	(オプション) コンフィギュレーション ファイルに入力内容を保存します。

シーケンス番号を無効にする場合は、グローバル設定コマンド `no service sequence-numbers` を使用します。

次の例は、`sequence numbers` を有効にしたログング表示の一部を示しています。

```
000019: %SYS-5-CONFIG_I: Configured from console by vty2 (10.34.195.36)
```

メッセージ重大度の定義

表 21-3 に記載されたメッセージの重大度を指定することで、メッセージの表示を特定のデバイスに制限できます。

特権 EXEC モードから、次の手順に従ってメッセージの重大度を定義します。

■ システム メッセージ ログिंगの設定

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>logging console level</code>	メッセージのログिंगをコンソールに制限します。 コンソールはデフォルトで、数値の低いレベルのデバッグ メッセージを受け取ります (表 21-3 を参照)。
ステップ 3	<code>logging monitor level</code>	メッセージのログिंगを端末回線に制限します。 端末はデフォルトで、数値の低いレベルのデバッグ メッセージを受け取ります (表 21-3 を参照)。
ステップ 4	<code>logging trap level</code>	メッセージのログिंगを syslog サーバに制限します。 syslog サーバはデフォルトで、数値の低いレベルのデバッグ メッセージを受け取ります (表 21-3 を参照)。 syslog サーバの設定手順の詳細は、「UNIX Syslog サーバの設定」の項 (P. 21-10) を参照してください。
ステップ 5	<code>end</code>	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 6	<code>show running-config</code> または <code>show logging</code>	入力内容を確認します。
ステップ 7	<code>copy running-config startup-config</code>	(オプション) コンフィギュレーション ファイルに入力内容を保存します。



(注) *level* を指定すると、そのレベルおよび数値的により低いレベルのメッセージがログिंग先に表示されます。

コンソール以外のターミナルへのログिंगを無効にするには、グローバル設定コマンド `no logging console` を使用します。コンソールへのログिंगを無効にするには、グローバル設定コマンド `no logging monitor` を使用します。syslog サーバへのログिंगを無効にするには、グローバル設定コマンド `no logging trap` を使用します。

表 21-3 は、*level* キーワードを示しています。また最も重大なものから最も重大度の低いものまで対応する UNIX syslog 定義を並べています。

表 21-3 メッセージ ログिंगの level キーワード

level キーワード	レベル	説明	syslog 定義
<code>emergencies</code>	0	システムが不安定	LOG_EMERG
<code>alerts</code>	1	緊急の措置が必要	LOG_ALERT
<code>critical</code>	2	クリティカルな状況	LOG_CRIT
<code>errors</code>	3	エラー状態	LOG_ERR
<code>warnings</code>	4	警告状態	LOG_WARNING
<code>notifications</code>	5	通常だが重大な状態	LOG_NOTICE
<code>informational</code>	6	情報メッセージ	LOG_INFO
<code>debugging</code>	7	デバッグ メッセージ	LOG_DEBUG

ソフトウェアはその他に 4 つのカテゴリのメッセージを生成します。

- ソフトウェアまたはハードウェアの不具合に関するエラー メッセージ。warnings から emergencies の間のレベルで表示されます。これらのタイプのメッセージは、アクセス ポイントの機能に影響することを意味しています。
- debug コマンドの出力。debugging レベルで表示されます。debug コマンドは通常は、Technical Assistance Center (TAC) でのみ使用されます。
- インターフェイスの起動または停止への移行とシステムの再起動メッセージ。notifications レベルで表示されます。このメッセージは情報専用です。アクセス ポイントの機能には影響しません。
- リロード要求と低プロセス スタック メッセージ。informational レベルで表示されます。このメッセージは情報専用です。アクセス ポイントの機能には影響しません。



(注) 認証要求ログ メッセージは syslog サーバにログングされません。この機能は、Cisco Aironet アクセス ポイントではサポートされていません。

履歴テーブルと SNMP に送信される syslog メッセージの制限

グローバル設定コマンド `snmp-server enable trap` を使用して、syslog メッセージ トラップの Simple Network Management Protocol (SNMP; 簡易ネットワーク管理プロトコル) ネットワーク管理ステーションへ送信するように設定している場合は、アクセス ポイント履歴テーブルに送信されて保存されるメッセージのレベルを変更できます。また履歴テーブルに保存されるメッセージ数も変更できます。

SNMP トラップは宛先への到着が保証されていないため、メッセージは履歴テーブルに保存されません。syslog トラップがデフォルトで有効になっていない場合でも、レベル `warning` で数値的に低いレベル (表 21-3 (P.21-8) を参照) のメッセージが 1 つ、履歴テーブルに保存されます。

特権 EXEC モードから、次の手順に従ってレベルと履歴テーブルのサイズをデフォルトに変更します。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>logging history level¹</code>	履歴ファイルに保存され、SNMP サーバに送信される syslog メッセージのデフォルト レベルを変更します。 <i>level</i> キーワードのリストについては、表 21-3 を参照してください。 デフォルトでは、 <code>warnings</code> 、 <code>errors</code> 、 <code>critical</code> 、 <code>alerts</code> 、および <code>emergencies</code> のメッセージが送信されます。
ステップ 3	<code>logging history size number</code>	履歴テーブルに保存できる syslog メッセージの数を指定します。 デフォルトでは 1 つのメッセージを保存します。指定範囲は 1 ~ 500 メッセージです。
ステップ 4	<code>end</code>	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 5	<code>show running-config</code>	入力内容を確認します。
ステップ 6	<code>copy running-config startup-config</code>	(オプション) コンフィギュレーション ファイルに入力内容を保存します。

1. 表 21-3 は、*level* キーワードと重大度を示しています。SNMP を使用する場合、重大度の値は 1 ずつ増えます。たとえば、`emergencies` は 0 ではなく 1、`critical` は 2 ではなく 3 です。

■ システム メッセージ ログिंगの設定

履歴テーブル一杯になると（グローバル設定コマンド `logging history size` で指定された最大メッセージ エントリ数に達すると）、最も古いメッセージがテーブルから削除され、新しいメッセージ エントリが保存できるようになります。

syslog メッセージのログिंगをデフォルト レベルに戻すには、グローバル設定コマンド `no logging history` を使用します。履歴テーブル内のメッセージ数をデフォルトに戻すには、グローバル設定コマンド `no logging history size` を使用します。

ログング レート制限の設定

アクセス ポイントが 1 秒あたりにログングするメッセージ数への制限を有効にできます。すべてのメッセージ、またはコンソールに送信されるメッセージに対して制限を有効にできます。また特定の重大度のメッセージを制限から除外することを指定できます。

特権 EXEC モードから、次の手順に従ってログング レート制限を有効にします。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>logging rate-limit seconds</code> [all console] [except severity]	ログング レート制限を秒単位で有効にします。 • (オプション) すべてのログング、またはコンソールにログングされるメッセージにのみ制限を適用します。 • (オプション) 特定の重大度を制限から除外します。
ステップ 3	<code>end</code>	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	<code>copy running-config startup-config</code>	(オプション) コンフィギュレーション ファイルに入力内容を保存します。

レート制限を無効にするには、グローバル設定コマンド `no logging rate-limit` を使用します。

UNIX Syslog サーバの設定

次の項では、4.3 BSD UNIX サーバの syslog デーモンを設定し、UNIX システム ログング ファシリティを定義する方法を説明します。

メッセージの UNIX syslog デーモンへのログング

システム ログ メッセージを UNIX syslog サーバに送信する前に、UNIX サーバに syslog デーモンを設定する必要があります。root でログインし、次の手順を実行します。



(注)

UNIX syslog デーモンの最近のバージョンには、デフォルトでネットワークからデフォルトの syslog パケットを受け取らないものがあります。ご使用のシステムがこれに該当する場合、UNIX の `man syslogd` コマンドを使用して、リモート syslog メッセージのログングを有効にするために syslog コマンドラインに追加または削除する必要のあるオプションを確認してください。

ステップ 1 ファイル `/etc/syslog.conf` に次のようなラインを追加します。

```
local17.debug /usr/adm/logs/cisco.log
```

`local7` キーワードは、使用するログング ファシリティを指定します。ファシリティの詳細は、表 21-4 (P.21-12) を参照してください。 `debug` キーワードは `syslog` レベルを指定します。重大度の詳細は、表 21-3 (P.21-8) を参照してください。 `syslog` デーモンはこのレベル、またはより重大なレベルのメッセージを次のフィールドで指定するファイルに送信します。ファイルはすでに存在している必要があり、 `syslog` デーモンにはそのファイルへの書き込み権限が必要です。

ステップ 2 UNIX シェル プロンプトで次のコマンドを入力して、ログ ファイルを作成します。

```
$ touch /usr/adm/log/cisco.log
$ chmod 666 /usr/adm/log/cisco.log
```

ステップ 3 次のコマンドを入力して、 `syslog` デーモンが新しい変更を読み取ることを確認します。

```
$ kill -HUP `cat /etc/syslog.pid`
```

詳細は、UNIX システムの `man syslog.conf` と `man syslogd` コマンドを参照してください。

UNIX システム ログング ファシリティの設定

外部デバイスにシステム ログ メッセージを送信するときに、そのメッセージを UNIX `syslog` ファシリティのいずれかから発信されたものとしてアクセス ポイントが特定するように設定できます。

特権 EXEC モードから、次の手順に従って UNIX システム ファシリティのメッセージ ログングを設定します。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>logging host</code>	UNIX <code>syslog</code> サーバの IP アドレスを入力すると、メッセージをそのサーバにログングします。 ログング メッセージを受信する <code>syslog</code> サーバのリストを作成する場合は、このコマンドを複数回入力します。
ステップ 3	<code>logging trap level</code>	メッセージのログングを <code>syslog</code> サーバに制限します。 デフォルトでは、 <code>syslog</code> サーバは <code>informational</code> 以下のレベルのメッセージを受信します。 <code>level</code> キーワードについては、表 21-3 (P.21-8) を参照してください。
ステップ 4	<code>logging facility facility-type</code>	<code>syslog</code> ファシリティを設定します。 <code>facility-type</code> キーワードについては、表 21-4 (P.21-12) を参照してください。 デフォルトは <code>local7</code> です。
ステップ 5	<code>end</code>	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 6	<code>show running-config</code>	入力内容を確認します。
ステップ 7	<code>copy running-config startup-config</code>	(オプション) コンフィギュレーション ファイルに入力内容を保存します。

`syslog` サーバを削除するには、グローバル設定コマンド `no logging host` を使用して、 `syslog` サーバ IP アドレスを指定します。 `syslog` サーバへのログングを無効にするには、グローバル設定コマンド `no logging trap` を入力します。

■ システム メッセージ ログの設定

表 21-4 は、Cisco IOS ソフトウェアでサポートされる 4.3 BSD UNIX システム ファシリティを示しています。これらのファシリティの詳細は、UNIX オペレーティングシステムのオペレーターズマニュアルを参照してください。

表 21-4 ファシリティタイプキーワードのログイン

ファシリティタイプ キーワード	説明
auth	許可システム
cron	Cron ファシリティ
daemon	システム デーモン
kern	カーネル
local0-7	ローカルに定義されたメッセージ
lpr	ライン プリンタ システム
mail	メール システム
news	USENET ニュース
sys9	システム使用
sys10	システム使用
sys11	システム使用
sys12	システム使用
sys13	システム使用
sys14	システム使用
syslog	システム ログ
user	ユーザ プロセス
uucp	UNIX 間コピー システム

ログिंग設定の表示

現在のログिंग設定とログ バッファの内容を表示する場合は、**show logging** 特権 EXEC コマンドを使用します。この表示のフィールドは、『Cisco IOS Configuration Fundamentals Command Reference for Release 12.2』を参照してください。

ログिंग履歴ファイルを表示するには、**show logging history** 特権 EXEC コマンドを使用します。

■ ログイング設定の表示